

保険薬局におけるCKD患者への取り組み－施設入居者の検査データを利用して－

○大澤 満子¹、塙 裕之¹、花垣 美香¹
政木 京子¹、戸井 翔太¹、長岡 友香¹
佐藤 美紀¹、森田 明子¹、豊田 幸子¹
山口 貴子¹、竹内 大悟²

¹薬樹薬局八千代

²(一社)ソーシャルユニバーシティ

【目的】CKD(慢性腎臓病)の概念は、わが国でも浸透しつつあり、成人の8人に1人がCKD患者と言われている。これを高齢者や施設入居者に当てはめれば、さらに高い割合でCKD患者が存在すると推定できる。今回、当薬局で応需している介護老人福祉施設入居者を対象に取り組んだ腎機能に応じた薬剤の適正使用について報告する。

【方法】介護老人福祉施設入居者90名の体重、血清クレアチニン(以下Cr)のデータを入手し、Cockcroft-Gault式により推定クレアチンクリアランス(以下CCr)を計算した。必要に応じてCr値は補正した。得られたCCr値は担当医に報告すると共に、薬の調整が必要なケースでは処方変更等の提案を行った。2014年7月～2015年3月までの取り組み結果をまとめ、検討した。

【結果】対象患者の平均年齢は 87.1 ± 9.1 歳、男性14名(15.6%)、女性76名(84.4%)、推定CCr内訳は、30未満が42%、30～49が45%、50～59が6.7%、60以上が5.6%であった。得られたCCr値を基に定期薬について10件の処方変更等の提案を行った。その結果、4件で処方変更、2件は入院による処方削除、4件は継続となった。また、期間中の臨時処方では、13件疑義照会を行い、11件が処方変更となった。

【考察】加齢と共に腎機能は低下するが、要介護状態にある高齢者においては、想定以上に腎機能が低下していることが判明した。当薬局を利用している患者は高齢者が多いため、今回対象としなかった患者においても、かなりのCKD患者が潜在すると推定される。薬剤師はこれらの潜在するCKD患者に対して、積極的に検査数値を聞きだし、処方提案を行い、服薬指導に生かしていく必要があると思われる。